



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3710 号 2017.6.11 発行



フリーアナウンサー龍円愛梨×「ダウン症って不幸ですか？」姫路まさのりがインターネットラジオでダウン症の啓発を実施 Sankeibiz 2017年6月9日
インターネットラジオ局「SORA×NIWA(ソラトニワ)」を展開するノスプロダクター株式会社(本社：東京都渋谷区、代表取締役社長：小野坂直之)は明日2017年6月10日(土)より、ダウン症についての理解を深める新番組『ココロのバリアフリー』をスタートさせます。



スタートさせます。

オープンスタジオでの生放送を行いますので、お忙しい中とは存じますが、取材にお越しいただけますと幸いです。

*6月17日以降は、毎週土曜日15時からの1時間番組として放送いたします。

ココロのバリアフリー

■レギュラー番組について

放送局：ソラトニワ原宿 <http://www.soraxniwa.com/radio/player/harajyuku>

番組タイトル：ココロのバリアフリー <http://www.soraxniwa.com/radio/cocoro/>

放送時間帯：毎週土曜 15:00～(1時間)

出演：龍円愛梨 姫路まさのり

概要：有識者をはじめ、毎回、ゲストの方をお招きし、一般の方に向けてのダウン症への理解を深めると共に、ご家族や支援者に対する課題や不安の解決に繋がるよう有用なお話をお伺いし皆様に届けてまいります。小さいお子様をお抱えのママさんから、青年期を迎えたご家族まで視聴者の皆様にもメールや電話、SNSなどで参加を呼びかけ、出産、子育て、教育、自立、就労などの現状と、その思いや今後必要とされる課題などをお伝えしていきます。スタジオに会議スペースを併設しており、ゲストに応じてはワークショップ等も番組と連携して開催致します。

■ココロのバリアフリーについて

ダウン症がある多くの方が、発達の遅れこそあるものの、運動やコミュニケーションも取れ、私たちと変わらない笑顔の毎日を過ごしています。かつて短いとされていた寿命も医療進歩により、現在では健常者と大差ないところまで伸びてきました。通常2本ある21番目の染色体が、「3本」ある事が主な理由のダウン症。言ってしまうと、「たったそれだけの違い」とも置き換えられます。

とは言え、遺伝子の研究は途上であり、一般的に知られていない事柄ばかりです。ダウン症(21トリソミー)への関心度を上げる事が、ダウン症の方やご家族への理解を深める事に繋がると考えています。そしてそれが、ダウン症に限らず障害のある方やシングルマザー、高齢者、ひきこもりなど“社会的弱者”と呼ばれがちな人たちのことを理解され、負担を解消する事にも直結すると思っています。

日本が目指す『インクルージング』『多様性のある社会』へと進むために、心の中からバリアはフリーを実現していくことを主な目的とし、様々な展開を行っていきます。その中のハ



ブであり窓口として、インターネットラジオでのレギュラー番組を制作いたします。

■インターネットラジオ「SORA×NIWA(ソラトニワ)」

「家を飛び出して、街を、そして人生をもっと楽しもう！」をコンセプトに2012年に開設。タレントやモデルなどを中心に番組数は80を超え日本で有数の歴史を持つインターネットラジオ放送局です。原宿にスタジオを設けるほか、大阪・梅田にも拠点をもち、ほぼすべての番組を公開生放送で行っています。

●ソラトニワ原宿へのアクセス

JR原宿駅から竹下通りを経て明治通りへ。明治通りを渡り新宿方面へ進み、原宿警察署前の歩道橋の所のビル(THE SHARE)の1階奥です。

https://www.atpress.ne.jp/releases/130491/img_130491_4.jpg

企業就職へ養護学校の挑戦 高島の新旭に「職業コース」 産経新聞 2017年6月10日

■知識・技能習得へ授業の質・量拡充

県立新旭養護学校(高島市新旭町太田)の普通科に今年度、県内で初めて「職業コース」が設置された。職場実習を増やし、実戦的な職業訓練を積む狙い。9日には地元の陶芸工房を訪れ、作業経験や仕事に臨む心構えなどを聞いた。

「働くために大切な力は何ですか」「仕事の面白さは」。同市マキノ町知内の陶芸工房「祥鳳窯」。同校職業コースの生徒から、陶芸家、北村祥次さん(56)に次々と質問があがった。同コース創設に伴い設けられた「プロフェッショナルズ in 高島」の初の授業だ。

北村さんは「私が死んでも作った器は生き続ける。さまざまな巡り合わせが仕事の魅力」などと答え、南蛮焼きの茶碗(ちゃわん)づくりなどを指導。生徒たちはろくろの前で初めて触れる赤土に苦戦しながらも、声をかけあい作業した。

プロフェッショナルズ in 高島は、地元企業や個人事業主の職場に出向き、仕事を肌で学ぶ授業。各学期で1回程度開催する。学びの場を増やそうと新たに設けたカリキュラムだ。

職業コースでは実務作業にこだわる。これまで「作業学習」と呼んでいた園芸・木工・窯業の授業内容も拡充。園芸では花の生産だけでなく、出荷、販売まで手がけることで商品の流通について学ぶ。また、職場実習も計2週間だったのを5週間と大幅に増やす予定だ。

滋賀労働局のまとめによると、県内のハローワークを通じた平成28年度の障害者就職件数は1168件と過去最多。従業員50人以上の企業に法定雇用率(2%)を義務付ける障害者雇用促進法の効果もあり、雇用状況は好調だ。ただ同校は「法定雇用率以上の受け入れをする企業がどれほどあるかを考えると、就職活動でアピールできる能力をつける必要がある」とする。

今後、プロフェッショナルズ in 高島では、サービス業や製造業などでの実務経験も計画している。

この日参加した2年の西川颯さん(17)は「学校では感じられない生の雰囲気を感じ、仕事の大切さを学んだ。今後もこのような機会にたくさんのことを学んでいきたい」と意気込む。

同校は「将来の可能性を広げるため、今後も職業コースの生徒たちに限らず、さまざまな支援を行っていきたい」と話している。

ベトナム人実習生に注目 京都の介護施設 京都新聞 2017年6月10日

外国人が日本の企業や農家で働きながら技術を学ぶ「技能実習制度」の対象職種に11月から介護職が追加されるのを前に、京都の社会福祉法人がベトナム人実習生の受け入れ準備を進めている。将来的に日本の先進的な介護技術を母国に持ち帰ってもらうのが目的

だが、人手不足が深刻な介護職場を支えてもらう狙いもある。導入に向けて、いち早く人材確保に動いている。

特別養護老人ホームなど介護施設約20軒を運営する終野福祉会（京都市北区）は今年2月、担当者がベトナムを訪ね、日本語を学ぶ20～22歳の女性4人を新制度に基づいて受け入れると決めた。4人は来年2月に来日し、約2カ月間の研修を経てグループの施設で入浴の介助や食事の補助などを行う予定だ。

数年前から施設を拡充してきたが、人手不足が懸念されることから外国人労働者の受け入れを検討。これまでにベトナム人など外国人留学生をアルバイトで雇用したところ、作業や意思の疎通に大きな問題はなかったため、新制度の活用を決めた。

新制度の実習期間は最大5年のため、毎年3、4人を受け入れて常時15人ほどが在籍するようにする。賃金は住居費込みで月額16万円程度と日本人と同等の水準を考えているという。



小規模多機能の介護施設でアルバイトで働くベトナム人留学生。今後は技能実習制度で働く外国人が増えそうだ（京都市左京区・ガーデンハウス下鴨）

終野福祉会法人事業本部は「日本式介護をベトナムに伝えてもらい、それを学んだ人が来日するような流れができれば」と期待する。

特別養護老人ホームなどを運営する洛南福祉会（伏見区）も、終野福祉会と連携し、2月にベトナムで3人に内定を出した。来春からグループの施設で働いてもらう予定だ。

近年は求人を出しても応募が少ないため、将来を見越して決断したという。長田栄臣理事は「介護の仕事はロボットでは補えない。実習生によってサービスを安定的に提供するとともに、ベトナムでの介護職のイメージアップにも結びつけたい」と話す。

両福祉会はいずれも、現地との窓口になる監理団体「備中技研協同組合」（岡山市）を通じて準備を進めている。同組合は、全国約20の社会福祉法人などにベトナム人計約100人を送り出す計画を進めているという。

厚生労働省によると2025年には日本で約38万人の介護職が不足すると推計されている。技能実習制度は、業種などによっては一部で劣悪な労働環境や賃金の不払いなどの問題も指摘されているが、同組合は「介護職場は清潔でスタッフは温厚な人が多く、新制度では不正の監視機能も強化されたため心配はない」としている。



イモの苗植え 障害者と小3児童が交流 上毛町／福岡

毎日新聞 2017年6月9日
苗を植える小学生と月の輪学園の利用者ら

上毛町原井の障害者支援施設「月の輪学園」（木高德典施設長）の利用者と近くの町立唐原小の児童が8日、一緒にサツマイモの苗植えをした。梅雨の合間の晴れた空の下、学園内にある畑で、子供たちと障害者ら計約50人が協力して苗を植え、楽しいひとときを過ごした。

地域交流の一環で毎年の恒例行事

各務原市長選で知的障害男性が投票できず 対応不備、選管が謝罪

中日新聞 2017年6月10日

4月23日投開票された岐阜県各務原市長選で、重度の知的障害がある男性（18）が期日前投票をしようとした際、受付で口頭でやりとりした市職員に「本人確認ができない」と判断され、投票を断念していたことが分かった。市選挙管理委員会は9日、対応が不適切だったと認め、男性側に謝罪した。

市選管などによると、男性は4月21日、母親と市内の期日前投票所を訪問。受付で市職員から、本人確認のために氏名を尋ねられた。母親によると男性は氏名を答えたが、市選管は「職員は聞き取れなかった」としている。母親が代わりに伝えようとしたところ、職員に制止された。

男性は読み書きができず、発する言葉は周囲には聞き取りにくい、指で意思表示はできるという。母親は受付で知的障害があることを伝えていたが、市職員は氏名などが確認できる療育手帳の提示を求めなかった。母親は、口頭での本人確認は難しいと考え、男性と帰宅した。

男性は18歳選挙権が導入された昨年7月の参院選では投票できたという。母親は「今回も選挙を経験させてあげたかった。本人は残念そうだった」と話す。

市選管は、市職員が口頭以外での本人確認の手段を取らなかったことなどが適切でなかったと認め、改善を求めて選管を訪れた母親に陳謝。担当者は「障害者団体と協議しながら改善を考えたい」と述べた。

総務省選挙部管理課の担当者は「本人確認ができず障害者が投票できなかったという事例は、聞いたことがない」と話している。

◆口頭だけで確認は問題

<障害者の投票補助者を公務員に限定するのは違憲だと訴える訴訟で、原告側代理人を務める大川一夫弁護士の話> さまざまな障害を持つ人がいる中で、口頭だけで機械的に本人確認をしようとしたことは問題がある。市選管は、男性がどこまで話せるのかなどを調べ、能力に応じた配慮をするべきだった。

精神障害者の就職支援、医療機関と連携 重政紀元 朝日新聞 2017年6月11日

水戸公共職業安定所（ハローワーク水戸）は今月、管内の精神科医療機関と連携し、精神障害者の就職支援を始めた。精神障害者の雇用が来年度から義務化されるのに伴う事業で、準備段階から就業後の職場定着まで一貫した支援を行う。

協定を結んだ医療機関は、石崎病院（茨城町）、栗田病院（那珂市）、水戸メンタルクリニック（水戸市）。ハローワークとチームをつくり、ハローワーク内に新規で配置する専属のコーディネーターが調整する。治療のために通院している主治医はそのまま関与を続ける。

支援内容は、就職に関する知識・技術についてのガイダンス▽職業訓練・職場実習といった就労体験の提供▽定期的なケース会議の開催▽就職後のフォローアップ——など。今年度の対象者は40人で、期間は1人原則6カ月以内。

知的障害者、サッカー通じ成長 京都のチーム、就労アシスト期待

京都新聞 2017年6月11日

京都府京田辺市で児童デイサービスなどの事業を行っている福祉事業所が設立した知的障害者のサッカーチーム「QCバロンタン」が活動を広げている。健常者と一緒のチームでは萎縮して活動しにくいケースがあるといい、スポーツを通じた心身の成長や居場所作り、就労サポートに期待が高まっている。

事業所は有限会社ライフ・アシスト（井山信久代表）。8年ほど前に始めた運動教室が利

用者に好評で、2014年春に府内2番目となるチームを設立した。現在、市内外から高校生から社会人までの20人が参加する。

練習は、ラダー（はしご）を使ったウォーミングアップや、5対5のミニゲームなど本格的なメニュー。社会人サッカー関西リーグ1部「FC TIAMO」（枚方市）の村島孝史代表（37）や選手らが指導している。

5対5のミニゲームでボールを追う選手たち（京田辺市田辺田辺）

当初はルールが分からない選手も多かったというが、今年4月の全国障害者スポーツ大会京都代表決定戦で、日本代表を擁する「FCアスカ」を破った。中学でサッカー部だった城陽支援学校高等部3年の前田翔汰さんと翼さんの双子兄弟＝ともに17歳、京田辺市＝は「このチームでサッカーできて楽しいし、うれしい」と声を合わせる。



府によると、府内の支援学校にはソフトボール部や卓球部、球技部などがあるが、サッカー部はない。場所や人数の確保、ルールの難しさなどが背景にあるとみられる。一方で日本知的障がい者サッカー連盟によると全国の競技人口は5800人おり、府県の連盟参加も増えているという。

今年4月、中学生以下のジュニアチームも立ち上げた。年上の選手に憧れる子もおり、井山代表（50）は「これまで支えられていた選手が、年下を教えて支える側になる」と期待する。南山城支援学校中等部3年の木佐貫修司さん（14）の母・亜希さん（44）＝京田辺市東＝は「いろんなことができるようになり、子どもの世界が広がった」と喜ぶ。

就労にもつなげようと、毎夏、関西の知的障害者チームを集めて大会も開き、協賛企業に見てもらっている。

ライフ・アシストは、サッカーに続いて陸上部も設立した。将来は総合スポーツクラブとして企業や住民とつながる理想を描いている。井山代表は「スポーツを通じて、彼らにはこれだけできることがあるんだ、ということを伝えたい」と話した。

紀子さまと佳子さま 障害者ダンス大会に出席 NHK ニュース 2017年6月10日

障害のある人たちにダンスや音楽を楽しんでもらおうという大会が、秋篠宮妃の紀子さまと次女の佳子さまも出席されて、東京で開かれました。

この大会は、障害者福祉やスポーツ振興に取り組む東京のNPO法人が、国や東京都などの後援を受けて開きました。

10日午後、東京・渋谷区の東京体育館に到着した紀子さまと佳子さまは、開会式に出席したのに続いて、障害者などのグループによるダンスのパフォーマンスをご覧になりました。

国際基督教大学3年生の佳子さまは、高校時代、同級生とダンスチームをつくり、文化祭で演技を披露されたこともあります。

紀子さまと佳子さまは、音楽に合わせて伸びやかに踊る参加者に、笑顔で拍手を送られていました。

また、紀子さまとともに参加者との懇談に臨んだ佳子さまは、一人一人に「飾りは皆さんおそろいですか」、「踊る曲はどうやって選んでいるのですか」などと言葉をかけられていました。

広島でハートフルフェス 介助犬や絵画作品紹介／スポーツ用車いす体験

産経新聞 2017年6月11日

障害者に介護・福祉のさまざまな情報を提供し、健常者とも交流してもらうイベント「第1回ハートフルフェスティバル」が10日から、広島市中区東千田町で始まり、聴導犬や介助犬の紹介、障害者スポーツの体験などで人気を集めた。11日まで。

地域社会への福祉貢献活動の一環として、広島トヨペット（本社・広島市西区）が企画したイベント。県が後援、県内外8つの障害者支援団体などが協力した。

会場では、落とし物を拾ったり、靴下を脱がせたりしてくれる介助犬や、玄関のチャイムの音などを教えてくれる聴導犬の紹介が行われたほか、障害者らが描いた芸術性の高い絵や陶芸品の数々を展示。車いすを乗せ降りしてできる福祉車5台の披露、障害者スポーツ用の車いすを使っただけの体験なども行われた。

県内には1頭もいないという介助犬と聴導犬の紹介では、2頭が登場。落とし物を拾って口にくわえ、車いすに乗った人に渡したり、玄関のチャイムが鳴ったのを人に触って教えたりするデモンストレーションを披露し、障害者や市民らの熱い視線を浴びた。

また、障害者が描いたネコの絵は、あくびをしたり、目を細めたりするネコが表情豊かに描かれ、精微な描写の車の絵とともに注目を集めた。

イベントに協力したNPO法人スタッフ、鰯川華衣さん（49）は「自分の作品が披露されることに誇らしそうな障害者の人もいた。こうしたイベントは障害者が社会とつながるためにも大切」と話していた。

“世界一のドリアン” 97万円で落札 タイ NHK ニュース 2017年6月11日

「果物の王様」と言われ、独特の強いにおいとねっとりとした味わいが特徴の果物、ドリアンをオークションにかけて社会福祉のための資金を募る催しが、10日、世界一の生産地タイで行われ、最も高いものは1つ、日本円でおおよそ97万円で落札されました。

このオークションは、タイの首都バンコク郊外の町が、特産のドリアンを使って社会福祉のための資金を募ろうと開いたもので、地元の生産者が手塩にかけて育てた2キロから5キロほどのドリアン、合わせて9個が出品されました。

オークションにはおおよそ100人が参加し、熱気と独特の強いにおいが漂う中、旬のドリアンが次々と落札されました。タイでは通常、1つ1000円ほどで売られているドリアンですが、オークションは、「果物の王様」と言われるドリアンの中でも、「世界一を決める」と銘打って行われ、最も高いものは1つ30万バーツ、日本円でおおよそ97万円で落札されました。

このドリアンを落札したレストラン経営の男性は数日間、世界一のにおいを楽しんだあと、仕事仲間と一緒に食べるということで、「どんな値段でも落札したかった。甘く、クリーミーで、最高のドリアンだと思います」と話していました。また、生産者の女性は「育てたドリアンが評価されうれしいです。今後もよいものを作りたいです」と話していました。

オークションの収益金おおよそ670万円は地元の障害者施設や病院などに贈られるということです。

北の国から挑戦が始まった 網走、パラスポーツに挑む16歳 論説委員・佐野慎輔

産経新聞 2017年6月11日

きょう11日、横浜国際プールで開かれる日本知的障害者選手権水泳競技大会に16歳の高校1年生が挑む。山口源起くん。

この春、高校生活を始めた山口くんにとって、初めて北海道代表として臨む大会である。

先日、将来性豊かな障害者スポーツ選手の支援を目的に創設された「日本財団パラアスリート奨学金」制度の適用を受け、奨学生となった。「これを励みに、パラリンピックを目

標に頑張ります」。身長165センチ。クロールと背泳ぎが得意な小柄な体も、記録とともに大きく伸びていくに違いない。

オホーツクの風うけて

山口くんが学ぶ日本体育大学付属高等支援学校は今年4月、オホーツク海の風をうける北海道網走市に開校した。

知的障害の男子のみ、現在1年生19人が在籍する。北海道10人に加え、本土から9人が北の大地にやってきた。東京、神奈川、千葉、埼玉と長野、愛知。校舎に隣接して新築された3階建ての寄宿舎に暮らす。

山口くんは北海道だが、網走から遠く離れた旧渡島支庁の北斗市出身。初めて両親のもとから離れた生活も「友達がいるから楽しい」と屈託なく笑う。様子を見たくて同校を訪ねた。

3階建ての校舎は、もとは道立職業訓練校だった。ここを日体大が譲り受けて改装し、教室と実習室を設けた。

実習室はピザ窯もある2つの調理室に園芸作業室、さらに木工や清掃作業などが実践できる部屋、もちろんコンピューター室も完備された。敷地内の園地にはビニールハウスもあって、野菜づくりが進んでいた。

「すべては生徒たちが自立、社会にでていくための職能を学ぶ場です」と島崎洋二校長。毎日2時間、年間350時間が実習作業を基本とした労作教育にあてられている。

スポーツ教育を中心に

こうした教育はしかし、規模こそ違え、どの支援学校でも取り組まれてきた。掲げられた目標の地元密着も、どこにもあろう。この大きな特色は、やはりスポーツ教育にだけた日体大の附属学校という点にある。

保健体育、スポーツの授業は週4日、午後の5、6時間目に集中する。年間約280時間、そこに毎日、放課後1時間半の部活動。まだ水泳、陸上競技、卓球の3部だけだが、北海道らしくスキー部構想もある。

校舎内には2つの体育館と柔道場、トレーニング器具が置かれたエリア。外にグラウンドと今秋には屋根がかかる予定の150メートル直線トラック。プールがないため、山口くんは市内の屋内プールで練習に励む。

「体力、健康の増強に加え、全国トップレベルの選手育成」(島崎校長)を視野にいて、優秀な生徒は日体大に進学できる。知的障害者のスポーツ実施率は低く、特別支援学校高等部卒業生の進学率は0.5%にすぎない。そこを変えたい

島崎校長はじめ、多くの教職員は教育現場を経験してきた日体大OBや公立学校の教員出身者たちである。定年で一度は現場を離れた人たちの力を結集、公立学校では制約でなし得なかった取り組みも始めるという。新たな雇用は、見続けた夢の実現に結実していくだろうか。

スクラムを組んでこそ

「正直に言えば、私立の支援学校では経営的に困難が伴います。そこをどう補い、私立ならではの教育の実践ができるか。支援学校は一種の挑戦です」

政治家時代から行動力で知られた日体大の松浪健四郎理事長は、「教育への挑戦」という言葉でこの支援学校を語る。

もともと、「すべての人たちにスポーツを」というスポーツ基本法の理念をうけ、「スポーツ系総合大学として何ができるか考えた」結果の学校創設だった。反対意見を説き伏せ、資金計画を練り、創設にまでこぎつけたものの、一時は撤退も覚悟した時期もあったと聞く。

そこを救ったのが「地元の活性化に」と奔走した網走市であり、パラアスリート支援に乗り出した日本財団だった。さらには財政的な支えとなった北海道銀行など多くの企業群。校長室に、企業名が記された大きなボードが飾られてあった。

自治体でさえ、自分たちだけで社会問題を解決することが難しい時代。まして、一私立

大学だけではどこまでできよう。行政やNPO、企業群にメディアなど、がっちりスクラムを組んだ取り組みが必要である。

北の国から始まった挑戦。16歳の小さな体に大人たちの思いも重なる。みんな頑張れ。
(さの しんすけ)

石川) 重度心身障害児家族らの全国大会 支援法話し合う 定塚遼



朝日新聞 2017年6月11日
パネルディスカッションをする長井浩康さん(右端)、関秀俊さん(中央)ら=金沢市堀川新町

身体障害と知的障害がともに重度の状態にある重症心身障害の子どもを持つ親らが集まる



「第54回重症心身障害児(者)を守る全国大会」が10日、金沢市内のホテルで始まり、約1千人が参加した。社会福祉法人全国重症心身障害児(者)を守る会などの主催で、県内では初めての開催。四つの分科会ごとに支援方法などについての講演や質疑応答があった。

守る会によると、重症心身障害児者は全国に約4万3千人で、約1万5千人が施設で暮らしている。在宅部会で講演した同会事務局長の長井浩康さんは「親だけでは子どもの命を守れない。地域の方や学校などへ協力してもらうことが重要。親だけでなく他の人に慣れさせることは自立にもつながる」と話した。

同部会で県内の状況について説明した小松こども医療福祉センター長の関秀俊さんは医療施設などの地域偏在に触れて「能登など遠いところから金沢の病院に通わざるをえないという問題がある」と指摘した。

滋賀県から参加していた水野達郎さん(68)は週に一度、障害のある姉を見舞いに行くという。「会話はできないが、姉がご機嫌でニコニコしていると次の一週間は自分も明るくなる。逆もまたしかり。講演を聞いたり、情報交換したりしてためになった」と話した。
(定塚遼)

「司法や福祉の連携を」 再犯防止へ研究拠点設立 共同通信 2017年6月11日

薬物や万引きなどの再犯を減らすため、刑罰より支援を通じた取り組みを研究する「治療的司法研究センター」が成城大(東京・世田谷)に設立され、10日、記念講演会が開かれた。講演した前厚生労働事務次官の村木厚子さんは「『塀の中』だけでは立ち直りは完成しない。司法や福祉が連携して支援することが重要だ」と訴えた。

センター長で同大法学部の指宿信教授は、再犯率の高い薬物使用者に対し、米国では刑罰より治療や環境整備を重視した専門法廷があることを紹介。「研究結果を通じ、日本でも専門の法廷や裁判プログラムの導入につなげたい」と抱負を語った。

また万引きを繰り返す「クレプトマニア」の弁護を多く手掛けたセンター客員研究員の弁護士が「万引きをやめられないのは精神障害なのに、刑務所や拘置所での対応は十分でない。刑罰より、社会内で治療を受け、回復することが求められる」と報告した。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行

